

---

# シフト - 真理を映す目 -

raki & 竜司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シフト - 真理を映す目 -

### 【Nコード】

N1754P

### 【作者名】

r a k i & 竜司

### 【あらすじ】

作者：r a k i

その目に映ったのは、時の逆行だった

狂喜する少年、恐慌をきたす女、伝染する医者、推論する精神学者、世界を転換する生物学者、そして真実を追う記者。六人のエピソードは、次第に一つの答へと収斂する。人類に下された「審判」は世界にどんな変化をもたらすのか。

今、見つめ直すべき人間の在り方とは。  
全てが今、シフトする。

人類と宗教の在り方を問うサイエンスホラーです。

### 《注意》

\*この作品には、聖書を否定・非難する内容が含まれています。不快に感じるおそれのある方はご注意ください。

\*この小説はブログや他小説サイトにも掲載しています

## PROLOGUE - The Old Testament

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

### 旧約聖書 第一章 二十八節

古代ギリシアの哲学者アリストテレスはこう主張した。「動物は感覚性を有する生物であるが理性を欠いており、自然界におけるヒエラルキーの中では人間よりはるか下位に存在する。したがって、人間の目的の為の用途として、自由に使える資源なのである。動物は理性的な魂をもっていない。動物に対する人間の取り扱いには、あらゆる正義に関わる問題を生じないのだ」と。

そして彼だけではない。ローマ末期最大の教父アウグスティヌスやイタリアのスコラ哲学者トマス・アクィナスも動物の理性の欠如が、人間への従属を正当化すると主張した。

聖書はこのような人間観、そして動物観を、歴史に強く刻みつけた。

## PROLOGUE - The Old Testament (後書き)

プロローグです。

次話からが本編ですが、このプロローグも後に重要になります。

## EPISODE? - Rapture

「赤点の山を眺めながら狂ったように笑う僕が目には浮かぶようだよ……」

少年はくすんだ瞳を夜空に向けた。

それを見た灰色の猫は、鼻で笑うように部屋を出て行った。優雅に尾を振り、部屋を出て行く様子は、まるで人間を見下しているようだった。

彼は常々考えていた。高等学校で学ぶ「勉強」というものが「勉強ごっこ」に過ぎないのではないかと……。と。学生の本分は、紛れもなく学ぶことにあるだろう。しかしながら、学ぶ内容は正しく選ばねばならない。彼は、現在強制されている「勉強」が、自分が本来学ぶべきものと相反するものであると感じていた。

「くだらない。テストと課題で僕を振り回して、僕の時間を奪っていく……。あの御方なら、きっと解ってくださるだろうに……」

少年は自分の最も尊敬する人物を思い浮かべ、そう言った。

そこでふと、彼は時計を見た。

「……」

彼は目を疑った。

少年の目には、時計の針が逆回転しているように見えたのだ。

しかし、見れば見るほどその光景は鮮明な映像となって目に焼きついてくる。

彼は目をこすった。この眼前の異常を簡単に受け入れることが出来るはずがない。簡単に受け入れてしまえば、それは自らの「異常」を認めるようなものである。

「幻覚だ。そうだろう……。時間が戻るわけがない」

少年は呟きながら、再び時計を見た。



少年は笑いすぎて噎せ返った。すぐに、テーブルに置いてあったペットボトルのお茶を手に取り、喉に流し込んだ。

少年はだんだんと落ち着きを取り戻していった。しかし、すぐに興奮が舞い戻ってきたのが分かった。

気付くと、三日前の朝日が沈み出していた。

朝日が沈み行く様を見るのは、もちろん初めてである。それは想像以上に美しかった。彼の意識は、次第に「神」という存在に収斂しゅうれんしていった。

少年はハッキリとした口調で、叫んだ。

「僕は、神に選ばれたあ！！！！」

少年は窓を開け、再び大声で笑い始めた。

彼にはもう、世界が巻き戻る様しか見えていなかった。

……そう、もう見えやしなかったのだ。

異常に気付いた隣人が警察に電話を掛ける、その姿など。



## EPISODE? - Rapture (後書き)

読んでくださった方々に感謝します！

僕、今ちょうどテスト前なので、このエピソードは洒落にならないです（笑）

さて、この小説は完結するまで毎日更新します。

とはいえ、予約投稿を使うので、おそらくテストの関係もあって、次にパソコンをひらくのは完結後になると思います。

なので、ご感想、ご質問、ご指摘に関してはすぐには返答出来ませんので、どうかご了承ください。

ミスがあったときすぐに修正できないのは痛いのですが・・・

## EPISODE? - P a n i c

「あゝあ。あたしも、明日で三十歳か……。早かったわね……」

尚子なおこが細い指で缶ビールのタブを開けたは、二階の寢室のクォーツ時計が午後九時を差した頃だった。何気なく、彼女は時計を見つめた。

このクォーツ時計は、二年前に尚子がこの家に引っ越してきた際に購入したものである。大手時計メーカーの商品であるが、値段は一万二千六百円と、当然高級というほどでもない。購入後、ネット販売で売られていた同製品の値段が八千八百円であって、少々の落胆をした記憶など、彼女の脳内からは煙のように消えていた。

結婚もしないで住宅団地に家を買った尚子を、彼女の友人たちは揶揄やゆしていたが、彼女にとって自分だけの静かな場所を確保するとは何よりも優先されるべきことであった。幼い頃から、何かと一人で居ることを好んでいたのだ。友人関係を壊さないだけの最小限のコミュニケーションが彼女にとっての「会話」である。明日の誕生日もまた、「最小限のコミュニケーション」が出番を迎えそうなイベントであった。

「……孤独って嫌だわ」

尚子は閉ざされた窓のすりガラスを見て呟いた。

それは彼女が一人暮らしの寂しさを嘆いた言葉ではなかった。

彼女の中で「一人で居ること」と「孤独」とでは、意味が大きく違っていた。彼女は常々思っていた。「一人で居たいけど、孤独は嫌だ」と……。家族も友人も居てほしいけれど、彼らがプライバシーに深く干渉するのは不快だ、それが彼女の心情であった。

窓の向こうには、隣家がある。尚子はその家のことを、正しくはその家に住む親子のことを考えると、「孤独」への嫌悪を感じるのだ。

隣人は少々珍妙であった。

「最小限のコミュニケーション」を心に決めている尚子がたった一度だけ近所の井戸端会議に参加したことがあった。その起因となつたのが、隣の一家の行動であつた。

その一家は父、母、子の三人家族である。しかし、尚子が見たことがあるのは一人息子の高校生だけだつた。引越してまもなくは何も不思議に思つてはいなかったが、それが数ヶ月続けば異常である。

近所の嗜好きの主婦たちに因れば、母親は週に二、三度帰宅するそつだつた。何をしているかまでは不明であるが、決まつて帰宅するのは深夜で、何やら如何<sup>いか</sup>わしい生活をしていることは間違いないさうである。父親に関しては誰一人目撃したことはなく、その理由は海外出張であるらしい。

つまりは、高校生の息子は一人で生活をしているに等しかつた。その息子が、しっかり者で心優しく、爽やかな好青年ならば同情のしようもあるだろう。しかしながら、彼もまた非常に怪しげな存在なのだ。

彼は至つて普通の高校生である。普通すぎて取柄のないというような学生。すれ違えば弱々しいがそれでもしつかり挨拶をするし、外見も少々地味ではあつてもまともである。

ただ一つ、たった一つだが、見るものをギョツとさせる妙な行動があるのだ。

彼は毎月決まつた一日だけ、高校を休むのだ。その月の十五日、何曜日であろうと必ず十五日が来ると、彼は早朝からどこかに出掛けてしまう。それも、全身黒尽くめの出で立ちで。夏でも漆黒のコートを羽織つて

その姿は、怪しげな儀式を思わせるものであつた。それを見た誰もが、不快感を覚えるであろうその気味の悪さが隣家に住まう親子と近隣の住民のコミュニケーションをほとんど遮断しているようだつた。

尚子は、隣の学生の奇行は母親との関係にあると勝手に推測して

いた。母親に対する不信感や反抗心、そして孤独感があの奇怪な習慣を彼に植え付けたのであろう……と。

「アレ」を見てしまうと孤独が本当に嫌になる、尚子は以前友人にそう話したことがあった。彼女は彼に、底知れない恐怖を感じ取っていた。

隣の学生が黒いコートを着て自宅から出て行く光景を思い出して、尚子は一気に疲弊<sup>ひへい</sup>した。寝そべって軽く目を閉じると、彼女は激しい眠気に誘われた。

数秒経って、尚子は眠りに落ちた。

「……っ!？」

声になりきれていない音を発して、尚子は目を覚ました。

「……な、何!？」

けたたましい声が家の外から聞こえてくる。

それは人の声であり、叫びであると、尚子は瞬時に理解した。彼女のまどろみを一瞬で払ったのはどうやらこの「叫び」であったようだ。

「何の騒ぎ……?」

少なくとも酔っ払いが叫んでいるといった様子ではなさそうである。

「……………笑い声」

冷静になってその声を聴くことで、それが「笑い声」であると気付いた。

彼女は得体の知れない笑い声に恐怖を感じていた。その笑い声は、人間の笑い声とは到底思えないものだっただ。

「あっ……………」

急にその笑い声は止んだ。再び夜の静寂が戻ってきた。

尚子は窓を開けて外を見るべきか悩んだ。しかし、彼女の好奇心はいともたやすく恐怖に呑み込まれていった。関わるべきではない

と心が叫んでいるようだった。

ガラガラッ！！

不意に近くで窓が開かれる音がした。音は極近い所であったようだ。

「まさか……隣？」

隣家に住む学生の部屋の窓は、尚子の家の寝室の窓と向かい合うような位置にあった。窓と窓の距離はかなりあったし、高低差も僅かにあった。しかし、鮮明に窓を開く音がすれば、それはあの学生の部屋の窓が開かれたことに相違なかった。

一瞬、尚子は隣の学生がああ奇声を上げていたのではないかと思つた。しかし、あの陰気な学生があのようなけたたましい笑い声を上げるとは到底考えられなかった。どうやら、笑い声を聞いて窓を開いたようである。

そう結論付けた刹那、再び仰々（ぎょうぎょう）しい笑い声が住宅団地に響き渡った。

「ひっ……！」

尚子は驚いて声を上げた。

叫びとも取れるその笑い声は、止む気配もなく大気を震わせていた。その声は先程のものよりもより鮮明で強大であった。

それが意味することは、唯一つである。

「住宅団地に響き渡る笑い声は隣家の学生のものである」

尚子の恐怖はピークに達していた。

何なの！？ あの子、薬でもやってたっていうの！？

彼女は再び学生の黒尽くめの姿を思い起こした。なるほど彼は、出掛け先で薬物を買っていたのだ。それならば、納得がいく

尚子は半ば無理矢理にストーリーを作り上げた。そうでもしなければ、自分に危険が及ぶのではないかという不安に引きずり込まれそうだったのだ。

「……………そうよ。……………警察！」

そう言って尚子は電話の受話器を手につった。警察に来てもらう、そう考えたのだ。彼女は震える手で一一〇番をプッシュした。

ブルルルルル……ガチャッ。

『こちら、一一〇番。どうかしましたか？』

電話に出た女性は落ち着いた声で言った。

「と、隣の家の高校生が変なんです！」

『変……と言いますと？』

「急に窓を開けて大声で笑い出して、とにかく普通じゃないんです！……すぐに来てください！……」

尚子は、自分を落ち着かせ、訴えた。

『そこは、××市××町の住宅団地でしょうか』

「は、はい！」

警察は電話番号から住所を特定出来るが、彼女の言葉のニュアンスから察するに、どうやら近隣住民が既に通報していたようである。尚子は僅かに安心感を覚えた。

『そちらには既に担当が向かっておりますので、ご安心ください』

「はい……分かりました」

『一つよろしいでしょうか、あなたは隣の……と言いましたよね？』

女性は謎の確認をした。尚子にはその質問が何を意味するのか解らなかった。

「ええ……何ですか……？」

『こちらにも僅かに叫び声のような音が入り込んでいますが、その声の主は本当にその高校生なのですか？』

「……見てはいませんが、おそらくは……」

『確認出来ませんか？』

「……………」

尚子は女性の質問に苛立ちを隠せなかった。その言い方は、「頼み」ではなく「命令」であった。

「……………やってみます」

そう言つと、受話器を片手に這う様にして窓へと近付いた。依然として笑い声は発せられ続けている。窓を開ければ、五、六メートル先に笑う少年の姿があるはずだ。

ゆっくりと、すりガラスのはめ込まれた窓を開けた。開かれたのは五センチ程度であるが、覗き込めばはっきりと見える位置に窓は設置されている。

「何でこんなこと、あたしが……」

嘆きながらも、尚子は窓の隙間を覗き込んだ。

「……………ッッ!!」

窓の向こうには、恐ろしい光景が広がっていた。

けたたましく笑っていたのはやはり隣の学生であった。しかしその姿は、まるで悪魔に取り憑かれたかのようなものである。目をカッと見開き、手を広げて天を仰いでいる。充血したその目は、獣の眼光の如く鋭く、狂気に満ちていた。

尚子は恐ろしくなつて、受話器を放り投げ、後退りするようにして窓辺を離れた。

「何なの、あれ……………!!」

彼女は――〇番に電話が繋がっていることも忘れ、その場で身震いしていた。

何分が経過して、外でサイレンの音が聞こえた。警察が到着したようだ。

隣人は未だ笑い声を上げている。尚子はすっかり憔悴した様子で、遠目に窓を見つめた。僅かに開かれた窓からは何やら明るい光が入り込んでいる。

「朝……………」

そんなはずはなかった。確かに今は午後九時から午後十時の間、つまり夜であるはずだ。

しかし、夜ではあり得ないほどの光が外を照らしている。まるで

朝を迎えたかのような柔らかな光だ。

尚子は現在時刻を確認すべく、壁に掛けられたクォーツ時計に目をやった。

「……………??」

彼女の目には、ゆっくりと針が逆回転する奇怪なクォーク時計がはつきりと映っていた。



## EPI S O D E ? - I n f e c t i o n

精神科医、桐崎義光<sup>きりさきよしみつ</sup>は酷く焦った様子でノートパソコンを開いた。それは、ある症状に関する記録を、中森という同じ精神科医である友人にEメールで送るためであった。彼はその症状を発症した患者を診察するために、もう三日間睡眠を摂っていなかったが、もはや休んでいる暇は無かった。

そもそも、この記録を作ることになったのも、その症状の患者が警察から彼の病院に輸送されて来たのが事の発端である。そんなことは二十数年も精神科医を続けてきた桐崎でも初めてのことだった。「一体何故、こんな事が起きたんだ……!？」

桐崎は独り、疲れた声で呟いた。その声は空調の効いた部屋に僅かに響き、そして空しく消えていった。

そして、桐崎はEメールの本文制作画面を開き、キーボードを叩き始めた。カタカタという音を立てながら桐崎の両手の指がキーボードを走る。

彼はふと部屋の壁に掛けられた振り子時計を見上げた。時計の秒針はゆつくりと右に向かって回っている。

「……まだ猶予はある……か。くそつたれが……! 頼むからこいつを書き終えるまで何も起こらないでくれ……!!」

桐崎は腕時計を視界に入る位置に置き、パソコンのディスプレイに視線を戻した。

### 謎の症状に関する報告書

中森、この報告書を見たら、直ぐに行動を起こしてほしい。出来

るならば私も自ら動きたいが、おそらくこの私にもあまり多くの時間が残されているとは思えない。

今からお前が読むものは、決してフィクションでも不謹慎な冗談でもない。全て事実であり、何とかしなければならぬ問題だ。

この言葉が、後に大袈裟な言葉だったと言われるか、正確な予測であつたと言われるかは、現時点では判らないし、私には知る術も無いことであろうが、敢えて言っておこう。

これは人類の歴史の岐路になりうる問題になるかもしれない。

その諸悪の根源はある症状だ。その症状は極めて珍しかった。……否、新しかったのだ。

その症状を発症したのはある住宅団地に住む高校生だった。突然大声で叫び、近隣の住民に通報され、警察が身柄を捕らえたのが今月の十六日の晩のことである。担当の警官の話では、意味の解らない独り言を延々話し続け、取り調べもできない状態だったという。精神が壊れていることは誰の眼にも明らかであり、警察は一種の異常さを感じ取り、翌日十七日、精神科医である私の元へその高校生を送ってきたのである。

私の診察に際し、彼は興奮した様子で妙なことをずっと言い続けていた。

時が戻っている。

彼の目には、この世界の時が逆行しているように見えているようだった。

私が高中生を診察したとき、それは単なる幻覚であると診断出来た。そして警察には薬物の使用があつたか検査するよう指示するつもりだった。

しかしながら、数刻もしないうちに、もう一人患者が運ばれて来たのだ。

その患者は三十歳のOしだった。なんでも、最初に来た高校生の

住む家の隣家に住む女性だそうだった。そして驚くべきことに、彼女には高校生と同じ症状が起こっていた。

彼女は高校生と違い、幾分冷静に状況を話すことが出来た。彼女の話では、最初に自らの異変に気がついたとき、目に映る時間の逆行は緩やかで、現実の光景に強く依存したものであったという。つまり、時間の逆行には二段階の症状があるようだった。

初めに、自分の見ている現在の風景の「時間概念」のみが逆行する。正確には、時間概念により直接的に結びついているものだ。

例えば、時計がそうだった。時計の針の逆回転、デジタル時計なら数値の変化、砂時計ならば砂が下から上へと上がる、といった具合だ。そして太陽光もその一つだ。太陽光の与える朝、昼、夜の変化も時間と密接に繋がっている。

それらが全て本来の流れと逆に流れていくように見えるようだ。

次に、発症者の記憶に蓄積した時間が巻き戻る。しかし、この症状に関しては不確かなことが多い。

第一の症状は加速度的に巻き戻しのスピードを上げる。その速度が一定の速さを超えると、時間概念との関係が薄い光景も遡っていく。

その症状が広がっていくと、最終的に自分の人生を逆再生した映像を見ているかのような状態になる。

つまり、この段階に達した発症者は、完全に現実の映像を見られなくなる。視覚が奪われるのだ。

幸いしたのは、聴覚に関しては一切のダメージが無かったことだ。一人目の発症者である高校生は精神に異常をきたしていたが、二人目の発症者である女性は若干の混乱はあるものの、詳しい症状を聞くことができた。

その日、私は発症者二名を入院させた。この時点では、珍しい症状の患者が二人も同時に出了ことに驚くばかりだったが、後にこの感情は単純に恐怖に変わっていった。

十八日、午前のうちに前日の発症者二名と同じ症状の患者が四人

運ばれてきた。全員、初めの二名の発症者の住む住宅団地の住人だった。ここで私はある仮説を立てた。この症状は伝染するのではないかと。しかし、精神病の類であるならば、それが感染する可能性は薄くなる。仮に、脳に細菌が侵入し、患者全員に同じ症状を発症させているならば、感染のしようもあるが、それにしたって奇妙だ。感染力が強すぎる。飛沫感染ひまつくのレベルを大いに越えている。

十九日、謎を残したまま感染は広がった。

今度は一人目の発症者である高校生を取り調べた警察官だった。

三人の警察官が続けざまに運ばれ、次いで十数時間後には前日十八日に運ばれた団地の住人の家族、そして警官三人の家族が、同じ症状で運ばれてきた。

ここで私は確信した。確信せざるを得なかった。これは間違いなく「感染」だ、と。

そして同時に私は恐怖した。これが感染ならば、私はどうなの？ 全ての患者と顔を合わせている自分が、同じ症状に感染しないとは限らないのではないか？

翌二十日、私は遂に恐ろしい事実を知ることになった。

十六日に発症した高校生と三十歳の女性が死亡したのだ。それが何を意味するのか、私には十分に分かっていた。

発症したら最期、死に至るということだ。

この症状が感染するとして、発症までの潜伏期間は患者によってまちまちである。例えば、死亡した女性は高校生を介して感染したとすれば、数分間という短時間で発症に至ったことになる。

私自身が感染していたとしたら、今は潜伏期間ということだ。つまり、四日間発症しなかったことになる。

この症状は一体何なのだ？ もはや、私の手に負える問題ではない。

この謎の症状が国中に蔓延したらとんでもないことになる。

私は感染したかもしれない。この症状を発症した何人もの患者を診てきたのだ。

中森、頼む。この症状の謎を解明してくれ。そして、感染をストップさせるんだ。私にはどのくらいの時間が残されているのか、見当も付かない。私が死んだなら、そのときはお前がこの事件を止めるんだ。

桐崎義光

桐崎は汗が滲む額を白衣の袖で拭った。

震える指でマウスに手を置き、画面上のカーソルを「メール送信」のボタンに合わせ、静かにクリックした。

「……頼んだぞ、中森」

桐崎には、自分が感染したという予感があった。瞳の奥が熱く熱を持ち、死の感覚が脳から離れようとしないのだ。

桐崎は時計をじっと見ていた。

彼の目に映る時計の針はまだ、右に回っている。

## EPISODE? - Biology

渡部秀真わたべしゅんまはコーヒをすすりながら、昼下がりの研究室の小さな椅子に腰掛けた。

「暇だな……。誰か大それた事件でも持ち込んでくれないものか……」

生物学のエキスパート、学問に携わる者なら知らないものはないであろう彼は、大学教授が警察に協力し天才的な発想で難事件を解き明かすような絵空事えそらじこの主人公に自らを重ねて楽しんでいた。

来年で四十四歳の渡部だが、彼の類稀たぐいまれなる優秀な頭脳に対して、世界の評価は冷たかった。理由は誰の目にも明らかであった。いわゆる変人。彼とまともに、「楽しく」会話できる人類は限られている。彼の助手数名、彼の大学時代からの親友である精神医学専門の医学者、そして、現在の日本の内閣総理大臣である花沢昭一はなざわしやういちくらいである。

花沢昭一は、総理になる以前から渡部と交流があり、渡部は選挙の度に応援演説をしていた。渡部の一風変わった性格や、斬新な視点で書かれた著書は一般人にはある程度の人気を持っており、花沢の議員としての知名度や、好感度などは、ほとんど渡部が作り上げたといっても過言ではなかった。

そのため、渡部は総理大臣との太いパイプを持っている。

渡部は、そのような「繋がり」を掲げて、勝手に研究室に設置した四十二インチの薄型テレビの電源を点けた。助手が居ない研究室はあまりに静かで、渡部は居心地が悪くなってしまったようだった。このテレビも当初は超巨大液晶のものが取り付けられる予定であったが、さすがに非難を受け、「それじゃあ液晶を小さくするからいいでしょ」と訳の解らない理論を呈して半ば強引に取り付けられた

ものである。

そんなテレビから、耳を疑うようなニュースが飛び込んできて、渡部は仰天した。

『……最新のニュースです。一九〇五年、奈良での捕獲を最後に姿を消し、絶滅したと思われる二ホンオオカミが、群馬県×××市の山間部で発見されました……』

ガタッ。

思わず渡部は勢いよく立ち上がった。

「馬鹿な……！！ 二ホンオオカミが今頃だと！？ そんな話初耳だぞ！」

渡部はしばらく思考を巡らした後、落ち着きを取り戻し、椅子に腰を下ろした。

二ホンオオカミ……、剥製ですら世界に五体しかない絶滅種だぞ。信じられん……。

渡部は別のニュースに切り替わった後も、テレビ画面を眺めている。コーヒーマシンの湯気が画面を仄かに歪ませている。

プルルル……。

「……ああ？」

渡部は電話の音で目を覚ました。どうやら、ぼーっとしている間に寝てしまったようだった。

渡部は早歩きで電話に近付くと、乱暴に受話器を取った。

「もしもし、どなたかな？」

「……………」

受話器からは誰の声も聞こえなかった。聞こえるのは何故か電話のコール。

「ああ、やべっ……………」

電話の音は渡部の白衣のポケットから聞こえていた。信じられないことに、携帯の着信音と固定電話の着信音を聞き間違えたのだ。

渡部がポケットから携帯を取り出すと、画面には「I書店編集者

たなかりようこ

田中涼子」の文字が映っていた。しかし、渡部は画面を見ることがなく通話ボタンを押してしまった。

「もしもし」

「I書店編集者の田中です」

「……誰？」

渡部の四十三歳とは思えない無骨な対応に、電話の向こうの田中は呆れているようだった。

「ご冗談を。渡部先生、執筆の調子はいかがでしょう？」

「執筆？ 何だね、それは？」

「まさかとは思いますが、一行も書いていないということはないですよね？」

渡部は記憶を呼び覚ますかのように、天井を見上げた。

「ああ……」

渡部は恍けた<sup>とぼ</sup>声を上げた。記憶が徐々に蘇る。

「先生、何ですか、その嫌な予感しかしない感嘆詞は」

田中の声を聞くうちに、渡部の記憶は鮮明に復元されていった。

数ヶ月前のこと、今電話をしている田中という女性が訪ねてきた。彼女は渡部に本を書かないかと誘いに來たのだ。

テーマは「別視点の生物学」。変人と呼ばれる渡部の斬新な視点から書かれた生物学の本を出版することを、田中は狙っていた。渡部はその日、禁煙を諦めてタバコを解禁し、気分上々であった。その上、この田中という女性がまた面白く、若いのに話しの分かる人間であった。渡部は無論、そそのかされて快くその仕事を引き受けたのだ。

「うんうん……。も、もちろん書き終えたよ、田中ちゃん」

「いつ書き終えますか？ 渡部先生」

「書き終えたと言っているじゃないか」

「嘘です」

「僕が嘘をついたことがあるかね？」



「私は一度しか会っておりませんよ、先生？」

「……………」

田中は完全に渡部の心を読んでいた。

「締め切りはいつだったかね？」

「二週間後ですね」

「……わ、分かった」

「ちなみに今どれくらい書きましたか？」

「……………」

「先生、今度焼印でも入れましょうか」

「はい？」

「いやだなあ、分かっていらつしやるくせに、先生。締め切りを忘れないように肌に直接刻むんですよ」

「ひい！」

渡部は恐ろしさのあまり奇声を上げた。

「あつ、先生。どこに焼印を入れますか？ オススメはおでこ……いや両目です」

「田中ちゃん！！ 何言い直してるの！？ し、しかも、そこはもはや肌でさえないよ！？」

渡部の言葉に田中は「ふふふ」と不気味に笑った。

「では、二週間後の首……じゃなくて、締め切り忘れないで下さいね」

「た、田中ちゃん。首って何ッ！？」

「失礼します」

ツー、ツー、ツー。

渡部は白衣で冷や汗を拭い、携帯電話を閉じた。

「まったく、偉大な科学者をおちよくるんじゃないよ……」

渡部は一言ぼやいて、以前田中に渡されたはずの執筆に当たつての資料を探し始めた。研究室を私物化している渡部ならば、研究室に資料をしまっけていてもおかしくない。

「どこにしまったかな」

真昼の研究室には、付けっぱなしのテレビの音と、変人科学者の独り言が響き渡っていた。

三十分程経っただろうか。渡部は再び椅子に座り、コーヒーをすすっていた。

「ったく。資料はどこへ行っただかね。多分家だな……こりゃあ。いや、別荘か？」

研究室を散らかすだけ散らかして、渡部は早々に資料探しを諦めてしまっていた。探すのが面倒になった、という方が正しいだろう。彼のこの怠惰に何人が気を揉んだか分からない。そんな例を挙げる気になれば、枚挙に暇がないのだ。

渡部はふと電源の入ったままのテレビに目をやった。

「……今入ったニュースです。本日午後一時四十分頃、都内のS大学附属病院で、警察により一般人の立ち入りが禁止されたとのことです。立ち入り禁止となった理由は発表されていないとのことですよ。」

テレビを観る渡部の手は小刻みに震えていた。

渡部は画面を凝然<sup>ぎんじぜん</sup>として見た。渡部は一瞬、姿の見えない黙示録<sup>もくしりく</sup>的発見の断片を見たような感覚を覚えた。

病院の封鎖。余程のことが無ければ現代でそのようなことは大々的に行われない。

「S大学附属……」

渡部はS大学附属病院に数少ない友人の一人が居ることに気が付いた。S大学附属病院で何があったのか、友人に聞けば分かるかもしれない。渡部は携帯電話を取り出した。

コン、コン。

目的の人物をアドレス帳から引き出し、通話ボタンを押そうとしたその時、研究室のドアが叩かれた。

「……ちっ。こんなときに誰だ。……どーぞ」

予定を邪魔されて悪態を吐きながらも、渡部は来客の入室を許可した。おもむろにドアが開かれる。

「……なっ！！ お前かよ！！」

「俺じゃ悪いのか？ …… 渡部、久しいな」

渡部の目の前には、まさに今携帯のアドレス帳から呼び出された、彼の数少ない友人の一人が立っていた。S大学附属病院の精神医学者、なかもりひろあき中森弘明である。

「今電話しようと思ったところなんだ、タイミングいいねえ、中森い！ それとも…… S大学附属病院の件のお話して事かな？」

渡部は不気味な笑顔を浮かべて尋ねた。

「知ってたか。さすが、話が早いな。しかし、研究もしないでテレビを観ているとはな……」

中森は皮肉たつぷりに応えた。

「別に構わんだろう。研究費出してんだから、国も俺を必要とするんだろうさ」

渡部はいつもどおりに返した。どうやら中森の皮肉は意味を成さなかったらしい。

「しかし渡部、いい加減やめたらどうだ？ それ」

中森は木製のテーブルを挟んだ渡部の合い向かいの椅子に腰掛け、言った。

「何のことだ？」

「…… コーヒーをビーカーで飲むのはおかしいだろ」

テーブルには渡部の飲みかけのコーヒーが置かれていた。そして、容器はビーカーである。

「研究者なら、ざらにあることだろうが。気にすんな」

「お前の場合薬品を入れて、洗わずに飲んでいる可能性があるだろう」

中森が指摘すると、渡部は急に黙り込んで、何かを考え始めた。何やら不穏な空気が漂っている。

「……やべっ」

「……おいおい、マジかよ！」

「……大丈夫、死にはせん！」

「そういう問題じゃねーよ！ だいたい渡部、何で研究所を私物化してるくせにコーヒークップの一つも無いんだ！？ この部屋は！  
！」

「うるせえうるせえ。俺の部屋を俺がどうしようが俺の勝手だろーが」

「お前の部屋じゃねーだろ！！ あくまで私物化されているに過ぎんー！」

部屋に二人の怒鳴り声が響き渡った。このような言い争いも、もう慣れた光景である。二人は大学の同級生。昔からこのような会話は変わらない。

「……で、中森。お前は俺の有意義なコーヒークブレークを邪魔しに来たんだっけか？」

「有意義という部分にツツコミを入れたところだが、ひとまず流すことにしよう。俺が今日来たのは他でもない、お前に頼みがあったからだ」

「S大付属病院は関わってくるのか？ その話」

「ああ。あそこでもんでもない事件が起きている。人類の歴史の分岐点になりかねない大事件がな……」

「いい話じゃなさそうだなあ、そりゃあ。俺は直感的に気付いたよ。ペストやスペイン風邪みたいな、厄介な災厄が訪れるんじゃないかってな」

渡部はほんの少し真面目さを取り戻したような表情だった。彼の言ったことは嘘ではなかった。事実、彼は感じ取ったのだ。黙示録的な何かを……。

「なるほど、お前はあの封鎖を感染症だと予想したわけか」

中森は興味深げに言った。

「アレは完全に『隔離』だ。そうだろ？」

「違う。しかし、科学的には感染症じゃあない」

「……冗談だろう？ 感染症以外で隔離はない」

渡部は断言した。ただでさえ隔離そちという措置は何かと問題が多い。それが感染力の強い感染症でなければ他に何が理由になるというのか？

「なあ渡部、感染はするが、ウイルスも細菌も寄生虫も関与していない症状つてのを見たことがあるか？」

中森は渡部の目をしっかりと見据え、訊いた。

「そんなものは存在しない。もし存在するとしたら……」

「存在するとしたら……？」

「それはお前の分野、精神医学の範疇はんちゆうだ」

渡部は中森を指差して、はっきりとそう言った。

## EPISODE? - Revolution

研究室には深刻な表情をした二人の人物が、蛍光灯の明かりを照り返す黒いテーブルを挟んで向かい合っていた。

「今から話すことは、親友として頼みたいから話すことだ。決して科学者としてのお前に事件説明の依頼をしている訳ではない。俺は医者として、この症状から人々を守りたいだけなんだ。だが、無理なら断ってくれ。結果として、重い責任を負ってもおかしくないことだ」

精神科医、中森弘明は肅々と語った。

それを聞き生物学者、渡部秀真は黙り込んだ。しかし数秒の後、渡部は口角を上げもう耐えられないという様な表情で笑い出した。

[illegible]

「て、てめえ！！何が可笑しいんだ！こっちは真剣に……！！」

「何だ？ 改まりやがって。大学時代から俺らは馬鹿なことから本<sup>マ</sup>気なことまで、協力してきただろーが。俺の性格を知ってんだろ。」

人類の岐路だつて？ そんな話を聞いたら協力しない訳にはいかな  
だろ。俺は暇だと死ぬんだ。良い話持つて来てくれたじゃねーか、

中森！

「お前、馬鹿か！ お前はこの事件を分かっちゃいないんだ！ 今度はそんなゲームみたいな話じゃねえんだぞ！」

中森は研究室の外にも響くような声で怒鳴った。それを受けた渡部は急に真剣な顔をして言う。

「分かってないのはてめえだ、中森。俺はゲームにもお遊びにも本気を出す。お前が俺に相談するくらいだ。とんでもない事件だつてのは分かつてる。お前の相談に應えるのに手は抜かん」

.....

中森はただ沈黙した。渡部という男がここまで気張ることが滅多に無いということを中森は知っていた。

「中森、話せよ。今、S大付属病院で何が起きている？」

「S大付属病院だけじゃない。実際は全国……いや、先進国全域で既に数え切れないほどの人々が発症しているだろう。このまま手を打たなければ、人類は滅びる」

「何だと……？ 妙な冗談はよせ。さすがに人類が滅びるなんてことは……」

「本当の話だ。今のペースだと五年はかからない。それだけの感染力と死亡率なんだ」

中森は震える手を押さえつけるように両手の指を組ませた。

「死亡率のパーセンテージは？ それに感染経路」

「現在のところ死亡率は百パーセントだ。感染経路に関しては後で話す。その前に、これを見てくれ」

中森は胸ポケットから折り畳まれた数枚のプリントを取り出し、渡部に手渡した。

「これは？」

「俺の知り合いに桐崎という同業者がいる。この事件に気付いた最初の人物だ。彼はこの事件の概要をメールで送ってきた。そのメールをプリントアウトしたのがそれだ。現状を理解するならそいつを読むのが一番早い」

中森がそう言うやいなや、渡部は桐崎書いたメール『謎の症状に関する報告書』を丁寧に読み始めた。

渡部が口を開いたのは、三分ほど経ってからだった。

「……こいつは、ただ事じゃねえな。ホントにこんなことが起こってんのか？ 直で話したい。この桐崎義光つつう精神科医はまだ生きてるか？」

「……いや、残念ながら昨日、二十五日に彼は亡くなった。もっと早くに連絡がつけば詳しい話を聞けたんだが……」

「待て、このメールは二十日に送られてきたんだろ。どうしてその時点で電話しなかった？」

「桐崎は何度も俺の家や職場に電話したようだが、俺はアメリカの

学会に出ていて連絡が届かなかった。だからわざわざEメールを送ってきたんだ。二十日に受信したメールを観ることができたのは昨日だった。だが俺が電話した時には既に桐崎は死んでいた。数時間の差で間に合わなかったようだ」

中森は苦しげに話した。後悔は尾を引いていた。自分がもっと早くメールを見ていればと思わずにはいられないのだ。

「そうか……残念だ。ところでS大付属病院が封鎖されてんのはどうしてだ？」

「感染は既にかなり拡大しているんだ。さすがに謎の感染症の存在に気付くものが出てきた。国が気付いた時には既に全国数十カ所で爆発的感染が起きていた。政府は解決策も分からずにこの症状の存在を公開すれば国民の混乱を招くとして、ただ内密に感染者を隔離することしかできなかった。その隔離場所の一つがS大付属病院だ。直にマスコミに見つかるだろうが、既にS大付属病院の他にもいくつか封鎖された病院はある。この事は、俺を含めた一部の医学関係者や専門家にしか伝えられていない」

「なるほど。しかしよお、俺はその『一部の専門家』に入ってねえのな。俺が今までの学説を何度、覆<sup>くつがえ</sup>してきたと思っただ。俺以上の天才がどこにいるつつうんだよな」

渡部は不満げに言い放った。確かに彼の言い分は理にかなっていた。生物学のエキスパートである渡部に事件の詳細が知らされないのは本来ありえないはずだった。

「しょうがないだろ。お前はそこら中で嫌われてんだよ。突飛な理論で話を掻き回しちまうからな。コペルニクスの転回のようなパラダイムが百八十度変わるような新説は、保守派の学者に嫌われるんだ。それがたとえ真実でもな。俺は今回の事件でそのことを嫌というほど思い知らされた」

中森はくたびれた表情を一瞬見せ、渡部を宥<sup>なだ</sup>めた。その言葉にはどこか含みがある。

「どういう意味だ？ まるでお前が今までの学説をひっくり返すよ



うな発見をして、非難されたかのような言い方じゃないか」

「いいか、さつきも話したが、俺はお前に事件の解明を依頼しに来た訳じゃない。俺は既に解決に結びつく可能性のある一つの答にたどり着いたんだ」

「答……だと？　ここで言う答って何だよ。謎の感染症の原因か？」

「原因は分からない。だが、感染の方法ないしは条件らしきものを見つけた。それを証明し、この事件を終息させれば、原因も分かるかもしれない」

「何！？　だとしたらこの事件は半分解決したようなものじゃないか！」

渡部はただ驚嘆した。感染の仕組みが判明すればある程度の処置はできる。つまり、今の停滞した状況を打破できるのだ。

「ところが、そうはいかなかったんだよ」

中森は声を荒らげる渡部を制して、そう言った。

「俺は桐崎の死を知り、この事件の異常さを身を持って理解した。一刻も早く止めなくては、人類が滅びかねないと思った。そこで俺は他の場所でも被害が出ていないか調べた。友人知人に当たり、国にも問い合わせた。その結果、既に全国数十カ所と同じような規模の被害が出ていた。既にWHOや国内の専門機関が動き始め、国の対策本部も立ち上がっていた。だが国民はそれを知らない。つまり報道規制を命じているんだ。だから俺は国に情報を開示するよう要求した。しかし、無駄だった。対策案が挙がるまで情報は開示できないと返答されるだけだ」

「……何だそりゃあ。一分一秒を争う事態だろうが！」

「ああ、だから俺は自分で解決策を見つけることにした。全国の患者のデータと、発症の経緯を取り寄せたんだ。担当医が発症してるパターンが多く、集まった情報は少なかった。だが、いくつかの共通した妙な発症パターンを見つけたんだ」

中森はそう話すと溜め息をつき、椅子に深く寄りかかった。

逆に渡部は身を乗り出して中森の話に関心を示した。

「妙な発症パターンか……。そいつが、感染経路の特定のヒントになったって訳か」

「ある家族が発症した。だが、その家族は発症するまでに誰にも会っていないかった。……どうやって感染したと思う？」

「……誰にも会っていないなら感染とは言わんだろう。あるいは、その家族が謎の感染症の起源とか？」

「いや違う。その家族は親戚から感染したんだ。……テレビ電話を通してな」

「……馬鹿な！ テレビ電話だと！？ そんなことがあり得るのか！？」

ガタンッ！

渡部は大声を上げながら立ち上がった。座っていた椅子が激しく音を立ててひっくり返る。

「担当医の記録では、その家族は親戚とテレビ電話をしていたらしい。その途中、その親戚が発症した。時が戻っていると話していたそうだから間違いない。それを見て、後に家族がこぞって感染したんだ。同じようにテレビ電話の相手が発症した事例がいくつかあったが、いずれもこの場合に限って感染が空間を越えている」

中森は力強く言い放った。

「つ、つまり、視覚か聴覚を通して感染するということのか……」

「いや、おそらく視覚だ。最初の発症者の高校生は大声で叫んでいたが、近隣住民は全員感染した訳ではない。それに、声を聞いて感染するなら、電話を通して被害はもつと拡大している」

「いや待て。視覚の方が感染は早いんじゃないのか？ 発症者を見ただけでアウトってことだろ？ それにしては駅や空港での、拡大がおとなしい……」

「俺も同じことを考えた。そして、俺はある仮定に至った」

「仮定……？」

中森はしばらく沈黙した。

重苦しい静寂が、中森に迷わせた。中森自身、未だその仮定を完

全には信じられないのだ。

「……目だ。発症者の瞳を正常者が見ることでの感染症は伝染する。俺がその仮定に至ったのは、患者の症状は全て目に関わるからだ。見ている風景の時間が戻っているように見え、次に自分の見てきた記憶が遡って見える。どれも『見える』だ。他にもデータがある。全盲の人が全く感染していないんだ。もちろん、確定的な証拠はない。だが、俺はこれが真実だと思ってる」

「……………」

遂に渡部は言葉さえ忘れた。ただ驚愕と恐怖と好奇心がせめぎ合い、渦のように思考を掻き回す。渡部の脳内では凄まじい嵐が起っていた。

数十秒か数百秒か、その静けさがどれほど続いたのか渡部には判らなかった。しかし、彼の脳はひとつの思考に収斂<sup>しゅうれん</sup>していった。

「……中森、俺は……お前の理論を支持する。……いや、信じるぜ」

渡部はニヤリと笑い、そう言った。

その言葉で、中森の不安を消し去った。

「……渡部……………ありがとう」

「……よっしゃ。中森、そいつを対策本部だかWHOだかに、教えてやれ。対策案を進言するんだ。国民全員に外から瞳を見れないようなゴーグルかなんかを配給させりゃあいいんだろ？」

渡部は声を張り上げて揚々と言った。

しかし対する中森の表情は厳しかった。

「いや、それはできない……………」

「はあ？ 何故だ？」

「俺は視覚からの感染の可能性に気が付き、既に対策本部に報告した。だが、相手にされなかったんだ。さっき言っただろう。視覚から病気は感染しないってのが常識だ。やつらから見たら俺の方がよっぽど病気に見えたんだろう」

中森は自嘲気味な薄ら笑いを浮かべ、諦念の混じった目を渡部に向けた。

「ちょっと待て、だったら打つ手無しか？ マスコミは報道規制があるし対策本部は聞く耳を持たない。お前、どうするつもりなんだ？」

渡部は倒れた椅子を起こし、どっしりと座り、深く息を吐いた。その様子を見て、中森は逆に質問を返した。

「なあ渡部、お前確か、花沢総理と仲良かったよな？」

中森は口角を僅かに上げる。

渡部は中森の意図を瞬時に理解した。

「……まさか、俺に花沢総理を動かさせて訳か？」

中森の頼みとは、まさに総理を動かすことだったのだ。

「渡部、総理はお前に大恩があるそうじゃないか。お前ならできないもないんじゃないか？」

「……ハハハハッ！！ なるほど……な。考えたじゃねーか、中森！ そう慎重になるな。頼まれなくともやってやる。……任せろ、上を脅すのは大得意だ。それがイヤだから連中は俺を避けてんだろうよ」

「……フツ。お前が親友で良かった。……決まりだ！ 渡部、花沢総理に記者会見を開かせるんだ。情報と対策方法を国民に対して発表させる。民放もラジオもネットも、全部使うんだ。対策本部がダメならさらに上に掛け合うまでだ！」

研究室に中森の言葉が響き渡った。

そしてこの二人の働きが、人類の歴史を大きく動かすことになる。

## EPISODE? - Revolution(後書き)

ここまでが、問題編というか、前編というか、謎の解明の準備が整った感じです。

次回から物語は完結に向かっていきます。

## MONOLOGUE - The gospel

前触れもなく蔓延した謎の感染症は、花沢昭一内閣総理大臣の対策記者会見から約二ヶ月を経て、完全に終息した。

現在、謎の感染症は「リwind症候群」という俗称で呼ばれている。原因となるウィルスや菌、物質は発見されず、正式な名称の決定や分類は後回しになった。

感染拡大の抑止には、三人の人物が大きく関わった。

精神医学の権威、中森弘明。彼は早い段階でリwind症候群の感染経路を特定し、多くの人を救った。

生物学者、渡部秀真。彼は内閣総理大臣にリwind症候群対策記者会見を開くよう助言し、その後もメディアを通して国民に注意を呼び掛けた。

そして、精神科医、桐崎義光。彼はリwind症候群の犠牲者だが、早い段階で人類と国家の存亡の危機を訴え、事態収拾の指針を示したとして賞賛を浴びた。

対策記者会見では、主に感染予防の方法が詳しく発表された。外から見て瞳を認識できないようなゴーグルが配布され、配布がされるまでは目隠しになるものの着用や外出禁止などの義務化をもって対応し、最後の発症者の死亡をもってゴーグルの装着の義務は解除された。

視覚を通しての伝染という常識外れの発表は当初、専門家や評論家から揶揄<sup>や</sup>、否定され、世界的にみると過半数の人間がそれを信じなかった。しかし、下らないと主張していた者が次々と死亡したことがマスコミによって報じられると、次第に信じないものはいなくなつた。

終息までの間、大きな問題が起きなかった訳ではなかった。地球は瞬く間に混乱の地へと変わり、リwind症候群の蔓延に伴った犯罪も増加していった。更に、経済が停滞し急激な不況期に陥り、

人類の生活の一部は一世紀前に戻ったかのような状態になった。そして何より、死亡率が百パーセントであるということが、人類に深い恐怖と混沌をもたらした。

また、沈静化が成功して数週間は早期解決を賛美する声が世界中を盛り上げていたが、あくまでもそれは、人類の危機を共に乗り切ったという一種の精神的統一感があるからだ。実際には被害者も多く、対応には杜撰さがあつた。

時が経ち、この事件が再びクローズアップされるとき、政府への非難や、人類全体の喪失感が増すことだろう。

今回の事件後、先進国の人口は事件前の三分の二未満になったと言われている。特に日本の被害者は多く、次いでアメリカ、イギリス、フランス、そして中国を始めとした新興国もかなりの被害を受けた。後進国の被害も含めれば、その被害者総数は想像をはるかに超えるものだ。

人類が失ったものは、多すぎたのかもしれない。

しかし、地球規模の大きな視野をもって世界を眺めると、失ったものばかりではないということが明らかになった。

これは、リwind症候群が鎮静して半年が経った頃によく公表されたことではあるが、リwind症候群が人類に猛威を振るっていたのとほぼ同時に、もう一つの驚くべき現象が起こっていたのだ。

### 「リバイバル現象」

これもまた俗称ではあるが、多くの人はこの現象をそう呼んでいる。

リバイバル。つまり、「復活」「再興」である。

絶滅種あるいは絶滅危惧種と呼ばれる動物たちがいる。ドードーやニホンオオカミなどがその類だ。

現在では見る事ができないとされ、既に滅びたはずの動物たち

が、現在、世界中で多数発見されている。

世界で最初に発見されたのはニホンオオカミだった。発見された日は丁度、精神科医の桐崎義光が死亡した日だ。

翌日には報道もされたが、その数時間後にはS大付属病院の封鎖報道、続いて花沢総理の記者会見、とメディアはリワインド症候群の話題で隙間なく埋まってしまった。

故に、ニホンオオカミの再発見という、ある意味歴史を変える大事件が起こっていたのにも関わらず、大々的にそれが知られることはなかった。

世界が落ち着きを取り戻した頃、科学者たちはようやく地球で異常現象が起きていることに気が付いた。

絶滅種あるいは絶滅危惧種に指定された動物の発見は次々となされ、留まることを知らなかった。それどころか、その勢いはリワインド症候群の鎮静と対照的に大きくなり続けた。

最初のニホンオオカミの発見から、半年で、発見、再発見された哺乳類や鳥類は百二十種を超え、その後有名な絶滅種、絶滅危惧種はほとんど発見された。

日本ではイリオモテヤマネコ、シマフクロウ、トキ、キタタキなどが複数体見つかり、世界ではエピオルニス、モア、リョコウバト、ドードー、オーロックス、クアツガ、ケープライオン、バーバリーライオンなど、絶滅種、絶滅危惧種として有名な種がいとも簡単に見つかった。

後の調査報告によると、見つかった絶滅種や絶滅危惧種は自力でその種を繁栄できるレベルの数が発生し、それぞれの種の個体数は生き残るために最適な、過不足ない数であるという。

しかし、どれだけ調査をしても分からなかったのが、発生の経緯であった。発見された絶滅種や絶滅危惧種はどこからやってきたのか？

その発生経路だけは、いつになっても判明しなかった。

現在、世界の話題はある噂で溢れかえっている。



「リワインド症候群」と「リバイバル現象」。その両者は同時に起こった。この二つの不可解な事件は、関連性があるのではないかな。そんな噂がどこからともなく広まった。

現在でも発見され続けている絶滅種や絶滅危惧種の個体総数は、奇しくもリワインド症候群によって亡くなった人間の総数に極めて近くなってきた。

もちろん、新たに発生した絶滅種や絶滅危惧種の総数は正確に力ウントできるものではない。しかし、生物学の権威である渡部秀真による発表では、現在の科学技術をフルに活用すれば、大まかな予測数値は出せるという。そしてその数値がリワインド症候群の犠牲者の総数と合致する可能性は大いにあるそう。

最近では、直接間接に関わらず、人類の発展によって存亡の危機に陥った動物ばかりが復活していると主張する者も現れた。

リワインド症候群の蔓延は、「人間から動物たちへの償いである」だとか、あるいは「動物たちから人間への復讐である」だとか、そのような人智を超えた噂が、人々の中で信頼に値する真実であるとさえ思われ始めている。

もちろん、それを下らないと主張する者はやはり多数存在する。だが、リワインド症候群が視覚を介した感染をするということが真実として浸透した今、この世界はかつて「非現実」「非科学」と呼ばれたものが、根拠さえあれば受け入れられる世界に変わっていた。不思議なことに、科学者がそんな噂を否定するのも虚しく、噂が現実として受容されるための根拠が次々に明らかになっていった。そして、人類に審判が下され、不条理によって消えていった動物たちが蘇ったという噂はもはや「事実」になろうとしている。

それが本当に事実であるかは誰にも分からない。しかし、まるで世界に意志があるかの如く、どこか名も知れぬ場所を目指すように、この世界は変化を続けている。

## E P I S O D E ? - S a c r e d b o o k

リwind症候群の蔓延から、まもなく二年が経とうとしていた。I書店出版社に勤める編集人、田中涼子はリwind症候群と深く関わりのある場所に来ていた。

精神科医の桐崎義光が最初に診察したリwind症候群発症者の高校生が住んでいた住宅団地だ。

彼女がそこを訪れたのは、取材の為だった。

三年近く前、田中はある人物に書籍の執筆依頼をした。今では個人的に親交もある、生物学の権威、渡部秀真だ。リwind症候群の終息に関わった人物としても有名である。

もちろんその頃はまだリwind症候群は身を潜めていて、出版予定の書籍の内容もそれとは関係ないものだった。しかし今回、世界中の人に「あの惨劇」の真実を知ってもらう必要があるという、渡部の意向によって、書籍の内容はリwind症候群についてのものに変更された。

そして、その書籍の編集と取材を担当しているのが田中である。

彼女は日頃、編集を生業としていたのであって、取材や執筆は彼女の仕事の範疇ではないのだが、奇しくも変人であると言われる渡部と長期に渡ってコミュニケーションを取れる人員は田中しかおらず、彼女が執筆に必要な情報の収集と伝達をすることとなった。

しかし、実際はそれだけではない。渡部は取材をした者と編集人そして執筆者が同一人物であるのが一番だと言った。小さな情報の誤解が、出版される書籍を読んだ人に思わぬ影響を及ぼす可能性があるあるそうだ。……つまり、渡部はその本にそれだけのメッセージを込めるつもりなのだ。「この本は現代の聖書になる」、渡部は田中にそう話した。誤った情報の伝達を防ぐため、渡部は田中を選んだ。彼女はそれだけ信頼されていたのだ。

そもそも、渡部秀真が直接取材できなかったのには理由があった。彼は現在、キリスト教カトリック教会の総本山であるヴァチカンに出向いているのだ。カトリック教会では、秘密会議が開かれ、その会議は既に開会から二十日が経過している。

意外にも、リワインド症候群が最も大きな影響を及ぼしたのはキリスト教の宗教観へのものだった。正確にはリワインド症候群とリバイバル現象の影響である。

世界中の宗教観が今、大きく変わり始めていた。

リワインド症候群とリバイバル現象の関連性はもはや「事実」に昇華<sup>しょうか</sup>していた。それが真実であるか否かは定かではない。しかし人々の中では、それは「真実」として確立していた。

各メディアは、連日その「噂」を人々に伝え続けた。

リワインド症候群とリバイバル現象は繋がっているという「噂」を。

リワインド症候群の蔓延で人間は多大なダメージを受け、同時に人類によって死に追いやられた動物たちがリバイバル現象で再興した。そして、犠牲になった人類と再興した動物の予想総数はほぼ一致した。

それは、まるで人類が死という天罰を受け、その命が転生して動物たちが復活したかのような、そんな構図を世界に発信していた。

キリスト教の聖典の一つ、旧約聖書には人間と動物の上下関係がはっきりと記されている。神は己の姿を模して人を造った。そして、その人間に地上の動物を支配する権利を与えた。殖え、栄え、海の魚、空の鳥、地上の生物をすべて支配せよと言った。

旧約聖書創世記に記されたその記述は、人類繁栄の全てだった。しかし、絶対の真理だった聖書は、その正当性が疑われ始めている。人類が地球の絶対の支配者であった時代は音を立てて崩れ落ち、動物たちの持つ生きる権利が重視され始めた。

動物たちを軽んじ、滅亡に追いやった人類がさも罰のような仕打ちを受ける。それは、聖書の、神の、そしてキリスト教の「権威」

を地に落とす出来事だった。

それは、ある意味では、当然のことなのかもしれない。そう思う人々は増えてきている。本来、「権威」などを持つてはいけなのだが、聖書に記された理念だからだ。「綺麗事」と呼ばれた理念が、正しく実現したとさえ言う者もいる。

人類が死に、代わりに動物が蘇ったという考え方が、世界中に広まった今、旧約聖書を聖典とする宗教は信頼を失いつつある。

代わって台頭したのが仏教だ。人も動物も、等しい命を持っているという考え方は、世界三大宗教の中で、仏教の信頼を強めた。

そんな宗教観の変遷が、カトリック教会に焦燥感を与えている。

渡部秀真は、リワインド症候群の残した謎の解明には、リバイバル現象の調査も必要だと考えた。そしていち早く、二つの現象の関連性を調べ始めていた。

世界の宗教の行く末を左右するのは、渡部の発する情報なのだ。最も真実に近いのは、実質渡部ただ一人であって、彼がカトリック教会の秘密会議において、キリスト教の未来についてどんな意見を呈示するかが、世界の信じる道を決める。

故に帰国後、彼の書く新たな『聖書』は、編集人である田中涼子にとっても興味深いものなのだった。

田中はその手助けをすべく、事件の起源を探ろうとしていた。

## **EPISODE? - Sacred book (後書き)**

ここからは、EPISODE? - Biologyで登場した田中涼子の視点で物語は進みます。

## EPISODE? - Origin

その住宅団地は、酷く廃れたイメージを漂わせていた。まだ昼間で、太陽光も住宅の隙間から多分に差し込んでいたが、人は少なく、まるで廃墟のようだった。もっとも、多くは実際に廃墟と化してしまっているだろう。この団地では二年前にリwind症候群の惨劇があつたはずだからだ。人が少ないのも、そのせいかもしれない。

田中涼子は大通りから団地内に入ったときから、背筋に僅かな寒気を感じていた。まるでそこに、凶悪な怪物が潜んでいるかのような、見えない影が住宅団地を覆っていた。

彼女は団地の近くまではタクシーで来たのだが、そこからは自分の足で目的地まで出向くことにしていた。ピリピリとした異形なムードが、肌を直接撫でる。

……きつと、何かある。

田中は心の中で確信していた。

しばらく歩くと、目的の家が見えてきた。記録上最初の発症者である高校生、徳永悟の住居だ。

徳永家は今、遠縁の親戚によって管理されている。しかし実際のところ、その家の鍵を持っているというだけで、管理はなされていない。親戚だという彼らも、リwind症候群の発症者が出た家には来たくないようだ。

徳永家の調査は、比較的スムーズに許可が出た。被害者徳永悟の肉親はみな、リwind症候群で死亡してしまい、管理権が委託された親戚も、徳永家にほとんど関心を持っていなかった。親戚間の関係は希薄で、どうも良好というわけではなかったようだ。

田中は、徳永家の前までやって来た。すると、住宅団地を覆っていた影の正体が解つたような心地がした。

それは死だ。死の冷たさ。死の寂寞観。この場所には死が浸透している。

……そうか、沢山の人が死んでしまったんだ。

死に囲まれた家々、そしてそれに包まれて実感する生の感覚。彼女は自分が生きてここに居るということを再認識した。

家の中に入ると、埃の臭いが僅かに鼻孔を刺激した。玄関にはすり硝子の窓がある。そこから太陽光が差し、玄関は比較的明るい。舞い上がる埃の粒子が細やかに輝いていた。

玄関からは西に向かって廊下が続き奥の方で左に曲がっている。南にはキッチンがあり、キッチンの西にはリビングがあり、部屋の奥が先ほどの廊下と繋がっている。一階の全ての部屋を確認すると、徳永悟が日頃使用していた部屋は二階にありそうだという結論に至った。階段は玄関に繋がっている。

ギシリと階段の軋む音を聞きながら二階に上がると、そこには四つの部屋があった。寝室、ウォークインクローゼット、トイレ、そして徳永悟の部屋。田中は徳永悟の部屋をすぐに認識できた。ドアに「SATORU」と書かれた札が下がっていたのだ。

ドアを開けると、徳永悟の部屋は六畳程の部屋だった。学習机と椅子、そして巨大な本棚。彼の部屋は主にそれらで構成されていた。入口近くに置かれていたのは本棚だ。

本棚には太宰治ださいあさむや芥川竜之介あくたがわりゆうのすけ、坂口安吾さかくちあんご、梶井基次郎かじいもとじろうの小説が整頓して並べられている。田中は何となくその内の一冊、『梶井基次郎全集』を手に取った。すると、相当読み込んであったのか、短編『檸檬』のページが自然と開かれた。

……青年の悩みを描いた作品『檸檬』。徳永悟もまた、そのような悩みを抱えていたのだろうか。

田中はそんなことを思いながら、本を閉じて棚に戻した。

二年間使用されていないということを除けば、部屋は比較的綺麗だった。薄く積もった埃を払えば、すぐにでも使えるようになるだろう。

しかし、田中には今更掃除をする気もなく、埃の少ない場所から調べることにした。

最初に目に付いたのは学習機の引き出しだった。

引き出しを開けてみると、B5判程度のサイズで白い革のカバーが付いたノートが一冊だけしまわれていた。表紙には黒い文字でこう書かれている。

そうつてんしんりかい  
「蒼天真理会」

田中はそれが何なのか知っていた。蒼天真理会は新興宗教団体である。リwind症候群が世に知れる直前、月に一度の定例講演会の直後、教祖が失踪して一騒動あった団体だ。彼女の知る限りでは、蒼天真理会の信者は、誰一人教祖の失踪に慌てなかったらしい。まるで、失踪することが分かっていたかのように。

ノートの表紙をめくると、会員証のようなカードが挟まれていた。

会員番号 2010 番

氏名 徳永悟

年齢 17歳

どうやら、徳永悟は蒼天真理会の会員、つまり信者であったようだ。

革のノートは、信者皆に配布されるもののようなのだ。

パラパラとページが捲めくれる音を立てながら、ノートを中を覗き見ていくと、六十ページ程ありそうなノートの三分の一近くまで文字が書かれていた。内容は、ある種の日記だった。蒼天真理会は月に一度、教祖による講演会を開く。ノートにはその講演会の様子が記録されていた。

田中はノートに書かれた最後の日記を読むことにした。教祖が失踪する直前、そして徳永悟がリwind症候群を発症する直前の講演会の様子が書かれた日記だ。何か重要なことが書かれているかもしれない。



田中は『第一〇八回講演会』と題の振られたページを開いた。

## EPISODE? - God

### 第一〇八回講演会

今回の講演会では、教祖様は終始、興奮なさっていた。毎回、世界の真の道理を、美しき御言葉で僕ら信者に説いて下さっていたのだが、今回はいつもの雰囲気と違っていた。何か、いつも以上に神々しく、言葉の一つひとつが直接的だったのだ。

教祖様は常々仰っていた。この世には絶対の平和は無いのである、と。何故ならば、この世に生ける全ての生命にとって平和は同一の定義で捉えられないからだ。

戦争は倫理的に悪であるとされている。しかし生命の重さが等しいならば、必ずしもそうは言えないそうだ。教祖様はこう仰っていた。

「戦争で失われた命がある。しかし、戦争をしなかったために失われた命もある。前者は多数派で後者は少数派であるが、その命の重みは等しく尊い」

平和とは何だろう。命の重さとは何だろう。教祖様は今回、その答を受けると仰った。しかし、何故かその場では答は教えて頂けなかった。

不思議なことに、僕らのような一般人でも、近いうちに身を持つてその答を悟ることになるそうだ。

教祖様はこう仰った。「今回の集会に出席し私の瞳を見た者には既にその権利が私から与えられ、後に君たちがその権利を更に全世界に発信するのだ」と。

僕は教祖様に尋ねた。答を知るとは具体的にどのようなことなのでしょう、と。教祖様は空を見ながら、厳かに以下のような主旨の御言葉を仰せになった。

「強いて言うならば、それは第二の誕生だ。自分の歴史を遡り、か

つて生まれ落ちたその瞬間を目にする時、君たちは生れ変わる。私もまだ歴史を遡っている途中なのだ。だが、神は私に確かに言った。私が生命の再興の起因になるのだ、と」

なんと、教祖様は神の御言葉を直接聴いたと仰るのだ。教祖様は最後にこう付け加えた。

「神に選ばれる予兆は、時の逆行だ。君たちも神に選ばれることを願っている」

教祖様はその言葉を最後に、会場を去ってしまった。そして今回の講演会は閉会した。

僕のような人間でも、教祖様が仰ったように神に選ばれることがあるのだろうか。

教祖様の御言葉の内容があまりに神秘的だったからか、今日はやけに瞳の奥が熱く、胸が高鳴っている。どうしても、神に選ばれることを期待せずにはいられない。

徳永悟の勉強机の前で、田中は絶句していた。その手には革のノートが握られている。

徳永悟が残した最後の日記の内容は、あまりに衝撃的だった。彼の書いたことが事実ならば、リwind症候群の最初の発症者は徳永悟ではなく、蒼天真理会の教祖ということになる。

日記に書かれた教祖の言葉はそのほとんどが抽象的表現で、一見すると意味不明な内容に思える。しかし、リwind症候群とリバイバル現象に関してある程度の知識を持った人間が見れば、話は変わってくる。

教祖の言葉は、明らかにリwind症候群とリバイバル現象によって変わり行く未来を指し示している。

教祖は「人間」と「動物」という言葉こそ直接的に使っていないが、明らかに生命の平等性を述べている。そして、二つの現象に関わるキーワードを使っている。「歴史を遡る」「生命の再興」「時

の逆行」などだ。

そして特に存在感のある言葉なのは「第二の誕生」と「生れ変わる」という表現である。自分の歴史を遡るならば、最後に辿り着くのは自らの誕生の瞬間である。そして、その「第二」の誕生は新たな生命として地球に蘇る。教祖は世界に広まっている噂のように、リwind症候群とリバイバル現象を関連付けて捉えているのだ。

田中は教祖の予言的な発言に悪寒を感じていた。直接彼の言葉を聞いた訳ではないというのに、心の奥底から畏怖に近い感情が湧き出てくる。

蒼天真理会の教祖は明らかに人智を超えた能力を行使している。彼が常時そのカリスマを持っていたのか、日記に書かれた会議の時にだけ「神の賜物<sup>たまもの</sup>」と呼ばれるような力を得ていたに過ぎないのかは、彼女には判断できなかった。

……それにしても、妙だ。

田中は違和感を感じていた。彼女が畏怖するに至った根本的な理由は、蒼天真理会の教祖が、絶対に知り得ず、それどころか予想することすら出来ないであろう事を事件の発覚前に知っていたからである。

『教祖様はこう仰った。「今回の集会に出席し私の瞳を見た者には、既にその権利が私から与えられ、後に君たちがその権利を更に全世界に発信するのだ」と。』

この記述はリwind症候群が視覚を通じて人から人に伝染することを、教祖が既に知っていたことを示している。

しかし、記録上最初に発症して病院に送られたのは徳永悟であり、その日は講演会が開かれた日よりも後なのだ。仮に徳永悟よりも早く発症した者が居て、その者と教祖が会ったとしても、その時点でリwind症候群が視覚を介して感染するものだとは気づくことはまずあり得ない。

……教祖は、何故リウィンド症候群の性質を知っていたのだろう。そして、謎はもう一つ存在した。おそらく、教祖はリウィンド症候群の最初の発症者であろう。ならば、教祖自身は一体どこからリウィンド症候群を受容したのか。

「……あつ」

田中は、教祖が言った発言のある部分を思い出し、再び徳永悟の記録を見た。

……あつた。この記述だ。

『神は私に確かに言った。私が生命の再興の起因になるのだ、と』

……そうだ。そもそも、彼は自らが起因であると言っていたではないか。つまり、リウィンド症候群の起源は教祖自身だというのだ。そして、教祖は蒼天真理会の講演会に集まった信者に、リウィンド症候群の症状を伝染させた。

田中は、蒼天真理会の講演会に何人の人間が集まるのか知らない。しかし、全国から数百もの信者が集まることは容易に予想が付く。全国から集まった信者は、リウィンド症候群の症状を受け取り、それぞれの住まう地方に帰って行く。そこからあの悲惨な事件が幕を開けたのだ。

だが、そこには教祖の陰謀があったという訳ではなさそうである。教祖はその言葉の端々に「神」という単語を使っている。

まるで、リウィンド症候群の種と、その性質の知識を、神から授かったとも言うように。

「まさか……神の仕業だとも言っの……？」

気付くと、彼女は疑問を口に出していた。その声は部屋の中で微かに反響し、やがて行き場を失い消えていった。

田中は徳永悟のノートを持って部屋を出た。もう、この部屋には何も無いように思えた。それに、この土地から伝わる瘴気（きようき）のような邪気が濃くなつたかのような気がしてならなかったのだ。

早くこの家を出たい、と田中は切願していた。

しかし階段の傍の窓からの光景を見て、田中は立ち止まってしまった。

「……な……に、これ……」

窓の外では、大量の鳥が空中を舞っていた。団地に張り巡らせられた電線にも隙間なく鳥が止まっている。しかも、全ての鳥が彼女の方を向いていたのだ。

田中は思わず身震いした。視界いっぱい存在する漆黒の鳥がこちらを見ている。

鳥たちは皆、同じ目をしていて。人間を嘲笑うような瞳。人間を怨むような瞳。人間に呆れるような瞳。

そして、彼等の目は呪いの言葉を、田中の脳内に投げかけてきた。

”ニンゲンハ、ココカラデタイケ！”

彼女の脳内にその言葉が響き渡ると、鳥たちは激しい羽音を立てて一斉に飛び立った。数百もの鳥たちが渦を巻くようにして天に翔かいでいく。それは黒く染められた竜巻のようだった。

田中は、鳥が消えてからしばらくの間、立ちすくんでいた。

”ニンゲンハ、ココカラデタイケ！”

鳥たちの声、否、動物たちの人間への叫びが未だ頭から離れなかった。彼らの言う「ココ」とは、いったいどこなのだろう。田中には、その指示語が「徳永家」を意味するのか、「団地」を意味するのか、あるいは「地球」を意味するのか、判断できなかった。ただその言葉は妙にリアルに脳内で再生され、闇に満ちたオラクルを得た心地がした。

早くその場を離れたいという気持ちと裏腹に、田中がようやく気

を落ち着かせ徳永家を出たのは、三十分程後のことだった。

帰りのタクシーの中で、田中は蒼天真理会の教祖が言ったという言葉を再度考えていた。

『神は私に確かに言った』

仮に、神と呼ばれる超自然的な存在が、二つの現象　リワインド症候群とリバイバル現象の背後にあるならば、地球で引き起こされた全ての事象はどう再考できるのか。

もしも神がいるならば、神は何故、リワインド症候群を地球に広めたのだろうか。

田中は神の目線で地球と人類を見つめ直した。自分が地球の管理者だったら、人類をどう見るだろう。

……独裁者。

彼女の脳内に浮かんだ言葉は「独裁」だった。人類は自らの繁栄と安泰と娯楽のために他の種を脅かしている。

しかし、リワインド症候群とリバイバル現象によって変わりつつある宗教観は、「人の為の神」を「全生命の為の神」に転換しようとしている。

……そうか、人類は地球から排除されるべきだと審判されたんだ。ようやく、田中は気付いた。リワインド症候群は人類を抹殺するために発生したのだ、と。そして、蒼天真理会の教祖はそれを広める役目を受けた。

……だけど、だったら何故、人類は生き残ったのだろう。

田中は思考した。人類がああ受難を乗り越えられたことの意味を。

「……………最後のチャンス……………か」

タクシーの中、運転手に聞こえないような小さな声でそう呟いた。……人類は己を律するチャンスをもたらったのね。

田中は結論に至った。

人類は今まで、自分の傲慢しやうまんに気付かなかった。しかしリワインド症候群とリバイバル現象が広まり、認知されることで、人々は人類がどれだけエゴイスティックであつたかということに関心を持ち始めている。

人類が生き残つたのは、尊い被害をもつてして、罪を認めるためだ。そして、その罪を再び繰り返さないように意識を改革するチャンスを与えるためだ。

田中は特定の宗教を信じているわけではなかった。しかし、今回の一連の事件には、人智を超えた力が働いている気がしてならない。これからも、人類は歴史を刻んでいく。この先もしも、再び人類が自分本位に地球を支配するようなことがあつたら、次元を超えた管理者は、人類にどのような審判を下すだろう。そのときは、今度こそ人類は滅んでしまうのだろうか。滅ぼされ、この星に真の「平和」が訪れるのだろうか。

そんな考えを巡らしていると、窓から車内に差し込む太陽の光が、天から地球を監視する視線のようにも思えた。

人類は共存する力を築かなくてはいけない。人が消えなくても、「平和」である地球を創つくらなくてはならない。

田中はその為にも、渡部秀真と協力して、現代の『聖書』を完成させることを決意した。それが人類の未来に繋がると信じて。

人類が、その目に未来を映すことができると、信じて。



## EPILOGUE - The Shift

あの事件から二年が経ち、私はあの事件の真相を以下のように捉えている。

我々人類が「目」を得たのはいつ頃なのだろうか。そもそも、生物が目を得たのは、何の為だったのか。

それはおそらく生き残る為　つまり、外敵から逃れ、より良いエネルギーを速く、大量に、効率良く取得、確保する為だろう。それが、機能的な側面から見た一つの必然なのだ。

しかし、人類にとつての「目」は、そのような必然性から大きく逸脱してしまったのかもしれない。

人は見るために目を得たのか、目を得たから見る事が出来たのか。生物は見るために目を得た。だが、人類はおそらく違った。

目を持って誕生したヒトは、ヒトから人に成るに従って「目」の存在を応用し始めたのだ。

それは、言うならば神への冒瀆。<sup>ばつぐん</sup>自然と道理を超越しようと欲した者の思考だった。

キリスト教で言われる「神」はこう言った。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

### 旧約聖書 第一章 二十八節

しかし、人はキリストの「神」が言うような存在ではないのだ。自らの為に他を犠牲に出来るような、そんな高尚な存在では決して

ないのである。

神は人の為の「神」ではなかったのだ。自然、地球、宇宙……

そのような大きな「道理」<sup>ことわり</sup>の為の神なのだ。

この事件は、その明証だ。

人を見る現実とは、自然ではない。人を見る未来は自然ではない。

それらは、人を見る過去が酷く歪んだ「不自然」である故に存在する人類の誤りなのだ。

神はそんな人間に、真実を見せた。純粹な過去を見せた。我々人類は盲目を通して正しい何かを見つめることが出来た。

人は生まれる前から歴史という名の罪を背負う。罪を背負うその瞬間 誕生の時 を自ら見つめる目を与えた。

そして、第二の誕生をもって人は死に、その手で、その目で奪っていた存在達が不条理で不自然な滅亡の炎から蘇る。

人は不条理を呼ぶ悪魔の目を持ってしまった。だからその命を償いに捧げ、消えていった種を呼び戻す責務を負った。

もう一度記す。もしも神という存在がいるならば、それは人の為にある訳ではない。世界、地球、宇宙……、それらの為にあるのだらう。

我々人類のような「大きく」て、そして「偉大」で、実は下らなく愚かな生物界の墮者は、その広い世界の一種族に過ぎない。愚かな人間はその事実を認めなくてはいけない。

そのために、人類は今、生き残ったのだ。

人は今、学ぼうとしている。その目が見るものを正しいものに変えるために。

人を自然の道へと、シフトする為に。

## EPILOGUE - The Shift (後書き)

エピローグです。

プロローグの聖書の一節と対比させています。

なお、エピローグは登場人物のひとり、渡部秀真の書いた本の一節という形を取っていますので、ここで渡部が述べた説は物語の中の彼個人の一説ともいえます。

解説と後書きを次の話として用意したので、最後までお付き合いいただければと思います。

## あとがき

最後まで『シフト - 真理を映す目 -』読んでいただいた方々に  
深く感謝いたします。

どうも、作者の r a k i です。

ここでは、後書きとしてこの作品の解説をしたいと思います。

解説をして内容を深めるのは半ば反則くさい感じはしますが、ど  
うかお見逃しくださいw

まず、私がこの小説を書くことと決めたのは今年（2010年）の  
初めくらいです。

私はその時、期末テストのテスト勉強が間に合わず、間違いなく  
赤点を量産する運命にありました（笑）

そして何を血迷ったか、テストを諦めてメールアドレスを作って私の  
長編小説執筆の相方である竜司に送信しました。

そのメールアドレスの内容は、私の叶わない願望をそのまま表現した  
掌編小説でした。

その願望とはもちろんテスト勉強の時間が間に合うことですw  
つまり・・・その時にネタのつもりで書いたのがこの小説のエピ  
ソード1の原型だったんです。

そんなおふざけ的な感じで始めた小説でしたが、私にとっては短編『想影（面影リグレット）』に次ぐ単独制作2作目であり、連載としては初の単独制作で、今となつては割と大事な作品になりました。というのも、かなり難産だったのでw

プロットは一瞬で最後まで思い付いたのですが、そこに大分新しい内容を付け加えていったので、情報量が膨大化し、とても執筆の難しい作品になりました。

私は、上に書いた相方と共に長編小説を書いています。その連載が忙しくなり、『シフト - 真理を映す目 -』の制作はしばらくの間延期していました。そして制作を再開したときに、新たに様々なメッセージをこの作品の中に加えていきました。

人間への天罰、優位性の転換

生命の平等

孤独な子供と大人

造られた常識を鵜呑みにする世の中

メディアによる良くも悪くも強い影響力

キリスト教の持つべきでない権威

これらのテーマを、メインテーマである《人間のあり方》を軸に展開したのが『シフト - 真理を映す目 -』です。

最初、この作品は「ホラー」にするつもりでした。しかし、多くのテーマを盛り込んでいく中で、「SF」に変えました。

正確にはそのどちらも違うような気がします。私はこの作品を、メッセージ性が強すぎる作品だと思ってます。それは良いところでも、悪いところでもあると思います。

けれど、その方向性で作っていったことに後悔はないです。そういう作品への工夫が、今後の糧になるだろうということは間違いないので。

ところで、実は、サブタイトルもまた、工夫をしています。

意味が複数含めることを意識し、エピソード全体を一言で的確に表せるようにしました。

私の意図した訳は以下の通りです。

P R O L O G U E - T h e O l d T e s t a m e n t

旧約聖書

EPISODE? - Rapture 狂喜（異常なほどの喜び）

EPISODE? - Panic 恐慌（恐れ驚く）

EPISODE? - Infection 感染（謎の症状の感染、桐崎から中森への情報の伝達）

EPISODE? - Biology 生物学（生物学者、二ホンオオカミの発見）

EPISODE? - Revolution 革命、転回（直接総理を動かしたこと、前衛的理論で常識を覆す様）

MONOLOGUE - The gospel 贖罪による救い、動物視点での福音

EPISODE? - Sacred book 聖典（聖書、Shift）

EPISODE? - Origin 起源（事件の起源）

EPISODE? - God 神、管理者

EPILOGUE - The Shift 変化、変遷

しかし・・・こう見ると、いろんな内容を書いたな、と思いますね。

ここまで雰囲気の違いをエピソードを繋げられたのは、やはり主人公を特定しなかったからかもしれませんね。  
私的には、この物語に主人公はいません。

どれか選べといわれたら、重要度から判断するに、渡部秀真か田中涼子になりますかね。

製作中、私が一番気に入っていたのは中森弘明ですがw

田中さんも気に入ってはいましたが、EPISODE?、?、?で誰とも会話がなかったので、性格が分かりづらかったかもしれないですね。感情移入ができなかった感じはします。

ただ、作者である私と、価値観や見る景色が一番近いのは田中涼子で間違いないです。

彼女には最後の役を担ってもらいましたら、当然ではあります  
が。

ちなみに、作品の内容について、少々語らせてもらいますと、  
EPISODE? - Biology の冒頭で、ニホンオオカミの発見の報道に渡部が驚くシーンがありますが、気づいていた  
けたとは思いますが、MONOLOGUE - The gospel  
e1 に繋がっています。



そして、作中ではめかされている、リwind症候群の死者が転生して新しく発見された絶滅動物になっているという説ですが、それが一応作中での解答になるわけです。

「一応」というのは、渡部秀真の書いた現代の聖書『Shift』のなかでリwind症候群の死者が転生して新しく発見された絶滅動物になっているという説が書かれているだけで、あくまで証拠はないということになっているので、完全にそれが真実と断言できないかもしれないからです。

だから、その説を確定させるのが嫌だったので作中では明かさなかったのですが、それに関して私の個人的な裏設定があります。

先程書いた EPISODE? - Biology の二ホンオオカミは、EPISODE? - Origin と EPISODE? - God で出てきた、蒼天真理会の教主の生まれ変わりです。

つまり、教祖が最初の発症者なので転生するのも一番早く、渡部が見た報道で見つかった二ホンオオカミが教祖ということになります。

二ホンオオカミにしたのにも、一応意味があって、

『オオカミ』 狼 『大神』 という、繋がりがあって、何気なく「神」の存在を示唆しているんです。

それに関して、ウィキペディアからの引用です

『日本では関東・中部地方において秩父の三峯神社や奥多摩の武蔵御嶽神社でオオカミを眷属として祀っており、山間部を中心とした狼信仰が存在する。オオカミを「大神」と当て字で表記していた地域も多く、アイヌではエゾオオカミを「狩りをする神」ホロケウ カムイ オオセカムイ「吠える神」などと呼んでいた。』

「狼」が地方によつて「大神」と当てられていたということを、絶滅動物の詳細情報を取材中に知つて、これは使わない手はないだろう、と思つてこの設定を採用しました。

そして、ここで「大神」繋がりで、「神」についての歴史と文化も調べる機会を得ました。

旧約聖書の一部を斜め読みさせてもらったんですが（神聖な文書を斜め読みして申し訳無いのですが）、やはりいろいろ思うところがありましたね。

この小説では、以下の聖書の一節が重大な鍵になっていました。

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

私はこの考え方は、結構好きで、生き物の命をもらって生きている人間の有り様を綺麗事抜きに正確に表しているとも言えなくはないと思っています。

作中では、どうしても物語なので、完全否定の形を取らざるをえませんでしたが、私としてはどの宗教も正しい主張を持っていると思います。ただ、それを絶対のものとするには難があるような気はしますけれど。

作中、後半に差し掛かったあたりで、渡部秀真がカトリック教会の総本山ヴァチカンに出向いて秘密会議に出ているという話がありました。

『世界の宗教の行く末を左右するのは、渡部の発する情報なのだ。最も真実に近いのは、実質渡部ただ一人であって、彼がカトリック教会の秘密会議において、キリスト教の未来についてどんな意見を呈示するかが、世界の信じる道を決める。』

って部分です。

「秘密会議って何だよ」

とお思いになられた方も多いとは思いますが、物語上「権威と陰謀」を持ったキリスト教会を描く必要があったので、こういった設定になってしまったつという感じです。

結局、渡辺秀真がヴァチカンの秘密会議でキリスト教の未来についてどんな意見を呈示したかは明確には書かれていませんが、彼がそこでどんな決断を下し、現代の聖書『Shift』を書いたのかは、EPILOGUE - The Shift を読んで頂いて想像できたかと思います。

というよりも、そこを想像していただけることが作者としての願いでもあります。

・・・という感じで、取り敢えず私が『シフト - 真理を映す目』を読んでいただいた方々に伝えたいことはほとんど書かせてもらいました。

反省点も多く、今後、もっと上手になりたいということも沢山ありますが、作者としてそれなりに気に入ったところも多い作品でした。

皆様が少しでも楽しんでいただけたならば幸いに思います。

お時間のある方は、何かご感想をいただければ嬉しいです。

この度は、17歳の未熟な私の、精一杯見栄を張った拙作に最後までお付き合いいただき、誠にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1754p/>

---

シフト - 真理を映す目 -

2011年9月10日03時27分発行